

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00454

研究課題名（和文）グランゴール作演出パリ入市式における16世紀フランス王権とパリ市民の研究

研究課題名（英文）A Study of French Kingship and the Citizens of Paris in the 16th Century at Ceremony to enter Paris directed by Grangore

研究代表者

平手 友彦（HIRATE, Tomohiko）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・教授

研究者番号：10314709

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：15世紀末までにパリで行われた歴代のフランス王・王妃の入市式を歴史的に分析し、パリ入市式の舞台であるサン・ドニ通りをパリ古地図から立体的に考察することを通じて、ピエール・グランゴールが携わったとされる1514年のルイ十二世妃マリー・ダングルテルと1517年のフランソワ一世妃クロードの入市式を写本と版本から比較分析した。ピエール・グランゴールはシャトレの活人画舞台だけでなく入市式全体の製作に関与して、サン・ドニ通りの七つの活人画舞台を使ってフランスの国威高揚とフランス王権への賞賛と同時に、詩人・劇作家としての自らの存在性を示したことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランス王権とパリ市民が接触するパリ入市式の実際を歴史的に地誌的に明らかにしたことで、16世紀の都市空間における市民が王権をどのように捉えているのかを理解することができた。これまで入市式の作り手についてはよくわからないところがあったが、詩人・劇作家がどのような意図で入市式に関与したかを考察したことで、16世紀フランスの詩人の社会性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Through a historical analysis of the entrance ceremonies of successive French kings and queens held in Paris until the end of the 15th century, and a three-dimensional examination of rue Saint-Denis, the stages of the entrance ceremony, from old maps of Paris, I compared and analyzed the entrance ceremony of Marie d'Angleterre, wife of Louis XII in 1514, and Claude, wife of Francois I, in 1517, in which Pierre Gringore was involved. Pierre Gringore was involved in the production of not only the Chatelet stage but also the whole entrance ceremony and he revealed that he admired France's national prestige and the French sovereignty, and at the same time showed his existence as a poet and playwright.

研究分野：フランス16世紀文学・文化

キーワード：パリ 入市式 ピエール・グランゴール

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

1．研究開始当初の背景

16 世紀のフランス王権は国中を一年中移動していたが、都市に入る際、王の即位や婚礼の場合には入市式が行われた。中世末ではこの入市式を市当局、即ち市参事会員らが担当したが、ルネサンス期になるとプロデューサー的な役割を持つ制作者が取り仕切ってエンターテイメント的な演出を行う。パリでそれを担当したと考えられる人物がピエール・グランゴールである。

ピエール・グランゴール（1475-1539）は大押韻派の詩人としてアレゴリー、教訓、諷刺詩の作り手であった。箴言や論争ものの他に、笑劇や阿呆劇も作り、自ら演じて上演し、当時パリで活躍していた笑劇集団「無憂児団」では頭目「阿呆の母」にも就任したことがある。グランゴールは、1501 年のフィリップ・オーストリア大公、1502 年のジョルジュ・ダンボワーズ教皇使節団、1504 年のアンヌ・ド・ブルターニュ女王の入市式に関与し、1514 年には国王ルイ 12 世の王妃メアリー・テューダーと 1517 年のフランソワ 1 世の王妃クロード・ド・フランスの入市式を任される。

国王と王妃のパリ入市式では、多数の有力市民が参加することによって国王と都市との関係が確認され、その有力な市民の序列も明らかになる。王権側としては、自らの王権の神聖と権威を象徴的に高め、都市側にとっては王権との関係を改めて確認する場となる。

2．研究の目的

ルネサンス期のパリ入市式は、中世末のそれとどのように異なり、プロデューサー的な役割を持つ制作者が登場したことで入市式はどのように変化し、その変化がフランス王権とパリ当局との間にどのような影響をもたらしたのか、そしてまたそこで演じられる文学者の役割は何だったのか。

本研究では、ピエール・グランゴールの入市式への関与の実際に注目して、フランス王権とパリ市との関係を明らかにし、同時に、都市空間パリの中で文学者の果たした役割とその意味を検証する。そのために以下の三つの目的を持つ。

- A パリ入市式の伝統と実際を明らかにする
- B ピエール・グランゴールの入市式の独自性を明らかにする
- C パリ市民によるパリ入市式の評価を考察する

3．研究の方法

- A パリ入市式の伝統と実際を明らかにする

中世末までのパリの入市式について J.Chartrou をはじめとする先行研究を用いて考察する。その上で、16 世紀のパリ市当局の戦略を、パリ市参事会議事録（F. bonnardot, *Registres des délibérations du bureau de la ville de Paris*, Imprimerie Nationale, 1883）などから読み取って考察する。この分析ではパリ市中の行列行程を当時の地図（1530 年の S.Munster、1530 年の G.Braun、

1552年のTruschetとHoyauの各パリ地図)を利用して入市式の場所を特定しながら考察を進める。

B ピエール・グランゴールの入市式の独自性を明らかにする

ピエール・グランゴールが演出したと思われる二つのパリ入市式、即ち1514年の王妃メアリー・テューダー入市式と1517年の王妃クロード・ド・フランス入市式の分析を行う。

まず、グランゴールが最初に関与したと考えられる1501年のフィリップ・オーストリア大公、1502年のジョルジュ・ダンボワーズ教皇使節団、1504年のアンヌ・ド・ブルターニュ女王の各入市式での関与の実際を、パリ国立図書館の写本(Bibliothèque Nationale de France, Rés. 8°Lb²⁸13及び Rés. Lb²⁹51^a)などで確認する。その上で、ピエール・グランゴールの二つのパリ入市式のテキストを分析するが、これはC. Brownによる校訂本 Pierre Gringore, *Les Entrées Royales à Paris*, Droz, 2005を基本としながらロンドン British Library (ms. Cottonian Vespasian B.II)及びナント市立図書館(ms.1337)所蔵の写本と細密画を対照分析し、王・王妃の行列が通過する市内各地点での画題、活人画の意味と意図、更にグランゴールによる王権とパリ当局への配慮を検討してグランゴールの文学的プロデューサーの独自性を明らかにする。

C パリ市民によるパリ入市式の評価を考察する

パリの住民の評価についてはパリで生活していたブルジョワの日記などを用いる。具体的には、『フランソワ1世治下におけるパリ市民の日記』(1515年-1536年 パリ国立図書館所蔵 Collection Dupuy No.743)、『ヴェルソリの家事日記』(1519年-1530年 パチカン図書館所蔵 Fonds de la Reine 671)、『フランソワ1世王の年代記』(1515年-1542年 パリ国立図書館所蔵)、ドリアールの『年代記』(1522年-1535年パリ国立図書館所蔵 Fonds français 25229)、「ヴェネチア大使報告書」などを分析して、一市民から見たパリ入市式の評価を考察する。

本研究は、文学テキストをその考察の中心に置いて、16世紀の文学者が社会的な空間に関与する実際、いわば「文学の社会性」を入市式という儀式を考察して明らかにするものであるが、文学テキストや参事会議事録などの古文書のみならず、地図や写本細密画などの資料を用いることで、16世紀のパリという都市空間を立体的・総合的に研究する。

4. 研究成果

パリ国立図書館、マザリーヌ図書館、国立古文書館、パリ市歴史図書館などへの3回の調査・資料収集と2回の国際学会(「マルグリット・ド・ナヴァールのネットワーク」Le réseau de Marguerite de Navarre (トゥール大学附属ルネサンス高等研究所 2018年10月5日~6日)及び「ルネサンスにおけるフランス語文学写本」Le manuscrit littéraire français à la Renaissance (パリ第4ソルボンヌ大学 2019年3月14日~15日))に参加して情報収集と意見交換を行い、パリ歴史協会が主催する講演と巡検「フィリップ・オーギュストの城壁」(2019年2月22日)と「フランソワ・ヴィヨンと中世のパリ」(2019年2月26日)に参加して中世末のパリの遺構を

調査した。これらの資料収集と現地調査、そして C. J. Brown 校訂 Pierre Gringore, *Les Entrees royales a Paris*, Droz, 2005 や『パリ市当局記録』と『フランス儀典』などの文献資料から、ピエール・グランゴールが関与したと思われる二つのパリ入市式、すなわち 1514 年 11 月 6 日ルイ十二世妃マリー・ダングルテールと 1517 年 5 月 12 日フランソワ一世妃クロードのパリ入市式を、サン・ドニ通りで行われた七つの活人画舞台(サン=ドニ門、ポンソーの泉、トリニテ、絵師たちの門、聖イノサン、シャトレ、王宮前)の現存する写本原稿の記述と細密画から比較検討し、パリ入市式の実際を明らかにした。

1514 年のマリー・ダングルテールの入市式については、グビエール・グランゴールは自らが中心となって活動していた演劇集団「阿呆の母」のような明らかな表象となってパリ入市式に関わっていないが、入市式の活人画舞台での王権の描き方から、グランゴールが当時の政治状況を巧みに利用して王権(ルイ十二世とその宮廷)への接近したことを明らかにすることができた。この研究成果は論文「ピエール・グランゴールによる 1514 年パリ入市式」として『CORRESPONDANCES コレスポダンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集』(朝日出版社、2020 年 3 月、pp.3-18)に発表した。

入市式のトポスとなるパリ地誌考察のために、16 世紀前半に製作されたとされる 5 点のパリ古地図(「パーゼルの地図」、「ミュンスターの地図」、「サン=ヴィクトールの地図」、「タピスリの地図」、「三人の人物のいるブロン地図」)の成立の分析と整理を行ない、一連のパリ古地図はことごとく 1520-1530 年代に制作された一枚の地図(現存せず)から成立したことを確認した。このオリジナル地図に最も近いとされる「グランド・グアッシュ」(1535 年頃に製作された原本は 1871 年に消失)について、パリ市歴史図書館で調査し、パリ入市式の活人画舞台が作られたサン・ドニ通りの当時の様相を分析した。このパリ古地図の調査では、グランゴールが著者と思われる版本『キリスト教の街の嘆き』の表紙にパリの姿をリアルに描いた木版画が印刷されていることも明らかになった。

次に、最初のパリ案内書とされるジル・コロゼ著『古代の華』に採用された「街路リスト」を詳細に分析し、その記述とパリ古地図の描写を照合し、1517 年クロード妃のサン・ドニ通りで行われた入市式の実際を立体的に明らかにすることができた。この分析の過程で、パリ案内書『古代の華』は、「パリ市の歴史」、「フランス国王系図」、「街路リスト」などから成る既存テキストの寄せ集めであり、そのヴァリエーションの検討から『パリの通りと教会』という独立したのテキスト群の存在とそのパリの地誌における重要性を指摘することができた。これらの研究成果は「パリ古地図のサン・ドニ通り - 1517 年パリ入市式とパリ案内の書『古代の華』 - 」(『欧米文化研究』第 26 号、2019 年 12 月、pp.59-80)として発表した。

15 世紀末までにパリで行われたフランス王・王妃の入市式(1389 年 8 月 20 日シャルル六世妃イザボー・ド・バヴィエール、1431 年 12 月 2 日ヘンリー六世、1437 年 11 月 12 日シャルル七世、1461 年 8 月 31 日ルイ十一世、1467 年 9 月 1 日ルイ十一世妃シャルロット・ド・サヴォワ、1484 年 7 月 5 日シャルル八世、1492 年 2 月 9 日シャルル八世妃アンヌ・ド・ブルターニュ、1498 年 7 月 2 日ルイ十二世)を古記録、日記、年代記、歴史書などから比較分析した。こ

の歴史的变化を踏まえた上で、1514年のマリー・ダングルテールと1517年のクロード王妃の入市式との比較分析を行った。この二つの入市式の舞台には相互に関連が見られ、一貫した流れがあって、入市式はひとりの製作者によって成立したことを示唆することができた。これまでの研究では、ピエール・グランゴールが入市式で関与した舞台はパリ市古記録などからシャトレのみとされてきたが、必ずしもそうではなく、グランゴールが入市式全体をコーディネートした可能性が高いことを明らかにすることができた。パリ入市式というフランス王権とパリ市民が接触する場で、ピエール・グランゴールが活人画舞台を使ってフランスの国威高揚とフランス王権への賞賛と同時に、詩人・劇作家としての自らの存在性を表したことを明らかにした。この研究成果を「パリ入市式とピエール・グランゴール」（『欧米文化研究』第28号、2021年12月、pp.49-71）として発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 平手 友彦	4. 巻 28
2. 論文標題 パリ入市式とピエール・グランゴール	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 欧米文化研究	6. 最初と最後の頁 49-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平手友彦	4. 巻 26
2. 論文標題 パリ古地図のサン・ドニ通り -1517年パリ入市式とパリ案内の書『古代の華』-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 欧米文化研究	6. 最初と最後の頁 59 80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平手友彦	4. 巻 84
2. 論文標題 パリ入市式と「一六二四年問題」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 流域	6. 最初と最後の頁 30-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 平手友彦他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝日出版社	5. 総ページ数 803
3. 書名 CORRESPONDANCES コレスポンドンス 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	トゥール大学附属ルネサンス高等研究所			